

わたしの原風景

3

スズキコージ

画家／絵本画家



一九四八年二月二十八日、静岡県浜松市、魚座生まれ。ローリング・ストーンズのブライアン・ジョーンズと同じ誕生日だ。終戦直後で母の乳が出ないので、父がお百姓のところにヤギの乳をもらいに毎日通い、それをグビグビ飲んで、なんとか育った。僕の一昔古い記憶（〇歳頃、夢の中かも？）は、小さな木のタライに気持ち良い湯が張っており、その中ですっかりこきげんにおしっこをしたっけ。

小野口村の小学校へ入学の日、朝早くからハリキッテ出かけ、学校の校門は確か開いていて、しーんとして誰一人居ないので、泣いて家に帰ったっけ。早く学校へ行きすぎたのだった。

体育の時間は全くダメで、なわとびがうまくできなくて、なさけなかった。鉄棒も最悪にダメだったが、両手でぶら下がるだけはぬきんでて、他の生徒は手を離してやめても、僕だけはずっと平気でぶら下がっているの、先生も気味が悪くなったらしく、「すずきはもうよし」と号令をかけて、僕は仕方なく両手を離したっけ。

小学校から帰ると穴掘りにはげんだ。小さな庭のあちこちに、トンネルを掘り、小宇宙を現出し、自分はそれを支配する神となって遊んだ。が、雨が降ると庭がスウズウになるので、親にしかられた。ので近所の平六山へいさに行き、近所の奴等と、自分達が這って通れる位の本格的なトンネルを掘り進み、トンネルの中で屁をこくと、全員が「クセエ、クセエ」とわめいて脱出して、平六池に浮かぶねじれた丸太に飛び乗ったり、二メートル位の高さの崖を皆でソロソロリと一列に歩いて下の田んぼに飛び降り、おしけついている奴はつきとばした。

ある日、平六さへいさ（西ヶ崎村と小松村の境に、小さなならぶき小屋を無断で建てて、独居生活をしていた仙人）の縄文住居に忍び込んだ。もし平六さに見つかったら、杖でなぐられるぞ！と思って、ぼくらは胸が高鳴った。ギイと戸を開けると、中央に炉があり、本が数冊と、土器のような腕がごろがっていた。あわててそこを出て、あたふたと近くの小川の橋で、白ヒゲの平六さが、杖を振り回して「小松の奴らあ、マイタッテエ〜」（訳：小松の奴等、みんなオバカサン）と演説中、僕等は田んぼの中を匍匐前進して聞き入った。